英米文化学会第41回大会（2023年9月3日就実大学）

『新スター・トレック』における シェイクスピア作品の引用－アンドロイドのデータと『ヘンリー五世』の場合

発表者：佐藤由美（常葉大学）

SFドラマ　『スター・トレック』シリーズについて

- ジーン・ロッデンベリー（Gene Roddenbury）製作総指揮のもと開始したSFドラマシリーズ。最初のシリーズ（「宇宙大作戦」（*The Original Series*、以下*TOS*））は1966年から3年間で終わるが、徐々に人気を博し多くのシリーズが生まれる。現在は、『スター・トレック・ディスカバリー』がオンライン配信され、そのほかにアニメ版や映画版などが生み出されている。
- 今回扱うのは、第二シリーズ『新スター・トレック』（*Star Trek: The Next Generation*、以下*TNG*）のシーズン3、第10作「亡命者（”The Defector”）」。

アンドロイドのデータについて

- 『スター・トレック』シリーズ（特に*TOS*や*TNG*）で顕著な特徴の一つに、シェイクスピア作品からの引用が行われることが多いという点がある。地球人であれ宇宙人であれ、主要人物の数名が作品からの引用を口にするが、その中で目立つ存在はアンドロイドのデータである。
- 彼は人間に近い存在になることを目指し、多様な試みをする。その一つとしてシェイクスピア作品を演じることがある。
- 「亡命者」はデータが『ヘンリー五世』のタイトルロールを演じる場面で始まる。
https://www.youtube.com/watch?v=xu25PG3L89s

「亡命者」冒頭について

- データはホロデッキと呼ばれる立体映像でヘンリー五世や他の登場人物を作り出すが、エンタープライズ号の艦長であるピカード（Picard）も協力している。
- 演じられるのは、アジンコートの戦いの前夜、ヘンリーが兵士に変装して一般の兵士と会話をするくだりである。
- この場面がいかなる意味で効果的か、何点か考えられる。一つはコメディリリーフである。白塗りの顔面で人間でないことが明らかなデータが、”I think the King is but / a man, as I am”を発するとき、視聴者は笑いを抑えられなかったであろう。

「亡命者」でデータが演じる場面の重要性

- しかし、ドラマを見るうちに、（ピカードとデータの練習後の議論を含めると）比較的長いこの場面はコミックリリーフであるのみならず、後のプロットと関連があることがわかる。
- 本発表では、引用された『ヘンリー五世』の台詞が原作のいかなる展開の中で発されているかをまず分析する。その上で、「亡命者」の各要素との比較をする。その過程で、『ヘンリー五世』を導入することで、このドラマにいかなる効果がもたらされたか、またアンドロイドのデータがピカードや亡命申請者とのやり取りを経ていかなる点で変化したかを考察する。

「亡命者」と『ヘンリー五世』との関連(1)

- 主要人物が階級や氏名を偽るが、当初の狙い通りの結果を得られないという共通点がある。ヘンリーはアジンコートの戦いの前夜、身をやつして下級兵士の陣地に出向き、「トマス・アーピンガムの配下」とのみ自己紹介し、会話する。コーラスによればこれは兵士たちを激励するためであるが、結果的には王の戦争責任の重大さを本人にも観客にも感じさせることとなる。
- 「亡命者」で亡命申請をするロミュラン人の正体はジャロック提督であるが、当初は武器補給部のシートール中尉と名乗る。地位と名を偽って情報提供をすることで、彼は戦争を止め自分の家族を守ろうとするが、ピカードらの信用を得られない。

「亡命者」における『ヘンリー五世』と本編との関連(2)

- また、戦争と陰謀も二つの作品に共通する要素である。『ヘンリー五世』の世界ではイングランドとフランスの間で戦争が行われており、戦争勃発に先立って陰謀が展開する。例えばヘンリーが友人と信じ重用していた貴族3名はフランス側のスパイであると判明したため、反逆罪で処刑される。
- 「亡命者」においては、地球人がロミュラン人の陰謀に振り回される。「シートール中尉」の情報では、ロミュラン人は地球人に戦争を48時間以内に起こさせるように仕向けようとしている。しかし、最終的に彼はロミュラン政府に偽の情報を与えられ、切り捨てられたおとりと判明する。

「亡命者」と『ヘンリー五世』との関連(3)

- 戦争の可能性を危惧するピカードの姿には、ヘンリー五世が苦悩する姿が重ねられている。同時にデータが人間に近づくにはまだほど遠いことも暗示されている。
- 21時間後に戦争が始まるかもしれない時点で、データは自分の演じた役割を思い出し、乗員たちの士気の高さを見るため見回ったらどうかとピカードに提案する。それに対しピカードは”Data, unlike King Henry, it is not easy for me to disguise myself and walk among my troops.”と返す。このやり取りからは、演劇から学んだことが現実世界でも応用可能だと考えているデータの未熟さが感じられる。
- ヘンリー五世とは違って、変装して部下ｋの話を聞きに行くというわけにはい

「亡命者」と『ヘンリー五世』との関連(4)

- データ退出後にピカードは”Now, if these men do not die well, it will be a black matter for the king that led them to it.”と独白する。冒頭でデータが演じていた場面ほどは目立たないが、これも『ヘンリー五世』からの引用である。
- この台詞はピカードが演じていた兵士のものである。王命に逆らえない大勢の者たちが戦場で流血の惨事の果てに死亡するとしたら、王の責任は重大なものになるという意見は現実的で、今回の戦争は正義の戦争であるというヘンリーの主張と全くかみ合わない。ピカードが兵士の意見を引用する場面からは、多くの者の命を預かる者の責任の重さが感じられ、同時にピカードとヘンリーの相違点も見える。

「アジンコートの戦いの前夜」の詳細

- 「亡命者」がアメリカで放映されたのは1990年1月1日。この日付は、アメリカでは比較的知名度が低い『ヘンリー五世』が使用された背景を考える上で、手掛かりとなる。
- 1989年には舞台を映画化したケネス・ブラナー主演の『ヘンリー五世』が世界的に話題となっている。「アジンコートの戦いの前夜」を扱っている二つの場面を比較すると、場面の暗さやアングルなどが似通っているとわかる。TNG版がブラナー版を参考にした可能性が高い。
- “I plan to study the performances of Olivier, Branagh, Shapiro, Kullnark.”というデータの台詞からもそれはうかがえる（ただし、後の二人は架空の人物と思われる）。

『ヘンリー五世』が「亡命者」に与える効果(1)

- ブラナー版『ヘンリー五世』はフォークランド紛争を経験した世代のための、（戦闘シーンも含めて）全体的に暗さと深刻さに満ちた映画であると言われている。そのブラナー版を参考にしたと思われる、「アジンコートの戦いの前夜」の場が「亡命者」で用いられたことに意味があると考えられる。

『ヘンリー五世』が「亡命者」に与える効果(2)

- 「亡命者」においては、『ヘンリー五世』は冒頭で紹介され、その後も言及されている。視聴者はデータたちの演じる場面を通して、また人によっては自分たちも見たブラナー版『ヘンリー五世』を通してこのドラマを見たかもしれない。
- 戦争をめぐって指導者と国民の間で齟齬が生じているという、ある意味現代的な側面を『ヘンリー五世』は有している。「亡命者」における、未来世界の戦争という想像し難いものに説得力を持たせるのに貢献したのではないだろうか。
- アンドロイドのデータはまだ未熟ではあるが、どう変化するかという関心をも抱かせる。

Selected Bibliography

- Burt, Richard. *Shakespeares After Shakespeare*. 2 vols. Westport: Greenwood Press, 2007.
- Burt, Richard. "Dumb and Dumber Shakespeares: Academic Fantasy, the Electronic Archive, Loser Criticism, and Other Diminished Critical Capacities." *Unspeakable ShaXXXspeares*. Palgrave Macmillan, New York, 1998. 1-28.
- Christopher, Brandon. "Star Trek's Shakespeare Problem." Graham, Kenneth, and Alysia Kolentsis, eds. *Shakespeare on Stage and off*. McGill Queens University Press, Montreal and Kingson, 2019. 230-240.
- Dionne, Craig. "The Shatnerification of Shakespeare." *Shakespeare after Mass Media*. Palgrave Macmillan, New York, 2002. 173-191.

Selected Bibliography continued

- Hatchuel, Sarah. "Shakespeare's Humanizing Language in Films and TV Series." *Borrowers and Lenders: The Journal of Shakespeare and Appropriation* 12.2 (2019).
- Kreitzer, Larry. "The Cultural Veneer of Star Trek." *Journal of Popular Culture* 30.2 (1996): 1-29.
- *The Oxford Shakespeare: the Complete Works*. Eds. Wells, Stanley and Gary Taylor. 2nd ed., Oxford: Oxford University Press, 2005.
- "The Defector". *TNG*. Dir. Robert Scheerer. Season 3. Episode 58. Paramount Pictures. 1 January 1990.